

原 著

家庭内高齢者虐待事例に対する社会福祉士のソーシャルワーク実践スキルの構造 —家族システム内機能・構造変容を目指したソーシャルワーク実践スキルを中心に—

The structure of social work skills of social worker to the elderly abuse

一瀬 貴子

要約：本稿の主な目的は、家庭内高齢者虐待発生事例の家族システム内機能や構造の変容を目指す社会福祉士のソーシャルワーク実践スキルの活用頻度や構造を明らかにすることである。調査対象とした地域包括支援センターに配置されている社会福祉士 435 名のうち、高齢者虐待事例を扱ったことのある社会福祉士 120 名の回答を分析対象とした。

ソーシャルワーク実践スキル評価指標の因子分析の結果、① 14 項目から構成される『養護者に情緒的支援・情報提供するスキル群』、② 6 項目から構成される『虐待原因として養護者や高齢者の相互作用パターンを分析するスキル群』、③ 6 項目から構成される『相互作用パターンの変容方法を家族成員に提示するスキル群』、④ 2 項目から構成される『問題解決を図る質問技法を用いるスキル群』、⑤ 2 項目から構成される『養護者の原家族との関係変容を図るスキル群』、⑥『養護者や家族成員の介護を賞賛した』の 6 因子が抽出された。各因子を構成する要素の平均スコアは、『養護者に情緒的支援・情報提供するスキル群』因子(平均得点 2.68)、『養護者や家族の介護を賞賛した』(得点 2.67)、『問題解決を図る質問技法を用いるスキル群』因子(平均得点 2.56)、『虐待原因として養護者や高齢者の相互作用パターンを分析するスキル群』因子(平均得点 2.43)が高かった。

Key Words：家庭内高齢者虐待・家族システム内機能や構造の変化・社会福祉士のソーシャルワーク実践スキル・虐待対応専門職

序章

地域包括支援センターで実施される数々の支援事業のうち、高齢者虐待への対応を含む権利擁護事業は社会福祉士がもっとも深く関わる事業であるため、地域包括支援センターの社会福祉士は、専門職倫理や知識および技術を習得し、その専門性に裏付けられた虐待対応ソーシャルワーク実践を行うことが求められる。高齢者虐待防止法第 3 条第 2 項では、虐待への対応は、専門的知識に基づいて適切に行わなければならないと定めており、虐待対応者としての社会福祉士の専門性を向上させるための研修プログラムの構築が必要である。

社団法人日本社会福祉士会の虐待対応ソーシャルワークモデル研究会は、リーガルモデルやメディカルモデルとは異なり、被虐待高齢者および虐待する養護者双方を

視野に入れたソーシャルワーク的視点と、ケアマネジメント手法などを用いた支援モデルに基づく虐待対応専門研修プログラムの構築を手がけている¹⁾。このプログラムは、高齢者虐待の発見段階からモニタリングまでの 8 段階におけるソーシャルワークの重要ポイントを導き出している点が評価できる。虐待対応ソーシャルワークモデルは、従来の被虐待高齢者の保護に加えて、虐待をする養護者への支援も含むことより、ソーシャルワーク本来の家庭や生活の再構築(ファミリーソーシャルワーク)が、介入の目標に入っている新しい支援モデルである¹⁾。しかし、ファミリーソーシャルワークの具体的な実施方法が示されていないため、プログラムの具体的な内容を検討する余地が残されている。

筆者は、家庭内高齢者虐待の解決には、被虐待高齢者や虐待する養護者の個人的特性が宿命的に虐待発生に結びつくとは考えず、家族機能的適応能力の様相に着目し、その強化を図る介入方法を模索することが必要であ

ると考える。筆者がこれまでに行った研究によると、虐待発生頻度の規定要因分析として、被虐待高齢者の個人的特性のほか、家族システムの家族内凝集性の低さ（家族内対立）や家族内ストレス対処戦略（養護者の感情表出に対する家族成員の情緒的・手段的支持）不足があることが明らかとなった²⁾。これらの研究成果より、家族システムの機能的適応能力の向上を目指した援助は、虐待発生頻度を抑制しようという方向性が導かれた。

日本社会福祉士会が提唱した虐待対応ソーシャルワークモデル¹⁾は、虐待対応専門職としての社会福祉士の資質向上にむけての大きな前進となるであろう。しかし、高齢者虐待の問題解決を目指す理論や技術を抽象的なレベルで理解できても、具体的な行動や言動のレベルでは、社会福祉士個人によって活用するスキルの頻度や内容には差異があるであろう。高齢者虐待事例に対するソーシャルワーク実践を具体的に理解し、用いることが出来る技能を獲得する研修プログラムを構築していくためには、ソーシャルワーク実践スキルを構成する一つ一つの要素を明らかにし、社会福祉士の専門的判断に基づいて実施出来るような教育を行っていくことが必要である。

本稿の主な目的は、家庭内高齢者虐待発生事例の家族システム内機能や構造の変容を目指す社会福祉士のソーシャルワーク実践スキルの活用頻度や構造を明らかにすることである。

2. 既存研究のレビュー

(1) 家族間暴力の発生プロセスに関する理論

本節では、高齢者虐待のアセスメントに必要な理論を探るため、「家族間暴力が何故生じるのか」という命題に関する既存研究で用いられた理論モデルを概観したい。全体的には、家族間暴力の原因を、虐待者の個人的要因に求めるモデルから、虐待者や被虐待者を取りまく環境との複雑な相互作用の影響を考慮しようとするモデルへと変化している。

社会学的アプローチとして、Gelles³⁾は、家族は社会でもっとも暴力を生じやすい社会制度であると主張している。そして、①家族は接触時間が長いから、家族成員間の葛藤を引き起こしやすい、②家族成員の年齢や性別が異なるため、争いが生じやすい、③家族内には、出産・育児・介護などのイベントによる変化が生じ、家族成員のストレスは他の家族成員にも伝わりやすい、④私的な空間であり、プライバシーが高いなどの特徴を指摘

し、家族が本質的に暴力を発生しやすい機能を持っていると述べている。社会的交換／統制理論^{4) 5)}では、家族成員は、他の家族成員と資源やエネルギーを交換しており、家族成員相互の家族内役割の遂行期待度と役割遂行度が合致しているときは、家庭内の均衡や秩序は保たれている。しかし、ある家族成員の役割遂行期待度が他の家族成員の役割遂行期待度に追いつかなくなった場合に、家庭内の均衡が崩れ、状況を暴力でコントロールする動きが生じるとする。社会的学習理論⁶⁾では、他者への攻撃性は、加害者の原家族での学習した結果と考える。幼少時代に親が暴力で問題解決を図ろうとする様子を観察し、扶養者としての攻撃的な役割モデルと暴力的行動を学習するという認知的プロセスを重視する。

個人と環境の相互作用からストレスを理解する理論モデルもある^{7) 8)}。家族を取り巻く環境ストレスが長引くほど、状況に対する虐待者個人の認知的評価は、脅威的なものとなる。環境的ストレスと社会に対する期待にギャップが生じると、虐待者は、欲求不満や大きな怒りを抱える。虐待者の忍耐の閾値が低いと、自分より弱者の立場にある人間に対する暴力が発生するのである。これらの理論モデルは、家族間暴力の原因を、加害者のパーソナリティ特性や認知的評価や対処スキルに求めており、加害者個人へのアプローチを考察していく上で、大変有効なものである。

次に、家族間暴力は、加害者の個人的適応のみならず、家族の機能的適応力によって生じるとする『ストレスへの二段階適応モデル』がある。井上⁹⁾は、「虐待問題は、加害者の個人的特性によって宿命的に発生するとは考えず、たとえそのような個人が家族内に存在しても、家族システムのあり方やその外部環境との関わり方によって、虐待の発生は抑制しようというのが、このモデルの核心である」と述べている。

家族機能的適応のあり方を考える上で有効な理論は、家族システム論^{10) -12)}である。その主な特徴は、①家族はサブシステムからなり、相互作用しあう。②家族は、開放システムである。家族は、外部と資源やエネルギーの交換を行うことにより様相を変化させ、平衡状態を保っている。③円環的・循環的因果律が成立する。④家族内の相互作用パターンには、家族成員が同じような主張を繰り返すような競合型の関係パターン（対称型）と、家族成員が互いに他の家族成員の行動を補い合うような支配—服従、保護—依存関係パターン（相補型）がある。健全な家族システムでは、対称型と相補型相互作用

用パターンが流動的に変化するという点にある。

(2) 既存研究のレビュー

わが国における高齢者虐待に対するソーシャルワーク実践に関する既存研究には、ナラティブアプローチ実践のプロセスと有効性に関する事例調査を実施し、虐待する養護者の自尊感情を高めるためにエンパワメントを重視した面接技法にソーシャルワーカーの専門性を見出した安達¹³⁾、在宅要介護高齢者に対して虐待する息子のパーソナリティ特性をもとに、虐待を「恐喝略奪・暴行型」あるいは「経済的・精神的パラサイト型」に分類し、分離のみならず親子関係の修復を目的とする介入の必要性を強調した鶴沼¹⁴⁾、高齢者虐待に対するソーシャルワーク実践として、生活モデルの視座の必要性を強調した山口^{15)・17)}、虐待の問題解決として、被虐待者自身の個人的要因・その介護者や家族・援助者や地域や環境の3層システムを考慮した問題解決のアプローチの重要性を説いた江原¹⁸⁾、被虐待高齢者や養護者の個人的特性のみならず、家族内の歴史的変遷、家族関係のあり方や精神疾患との関連性について洞察し、高齢者・家族・関係機関と様々なコミュニケーション方法を駆使するスキルや、ソーシャルワーク実践の各段階、状況の変化に合わせたアセスメント能力を高めることの必要性について述べている小銭¹⁹⁾などの研究がある。

しかし、より具体的なレベルにおいてソーシャルワーク実践を調査研究したものは、ほとんどが事例研究や実践報告となっている。具体的なソーシャルワーク実践を構成する重要な要素を明らかにし、社会福祉士が、ソーシャルワーク教育の中でどのようなソーシャル実践スキルを身につけ、向上させていくことが必要であるかを研究することが、今後の課題である。

(3) ソーシャルワーク実践スキルの定義

ソーシャルワーク実践スキルの定義に関しては、可算名詞として「特別な知識や訓練を要する作業や行動 (Skills)」を指す場合と、「スキルとは何かをうまく行うために必要な知識という能力 (Skill)」を指す場合がある。後者の定義を用いている研究には、前田²⁰⁾、小松²¹⁾、奥田²²⁾などがある。一方、前者のように、ソーシャルワークの技能 (特別な知識や訓練を要する行動 = skills) と、知識などを実践の中で効果的に活用する能力を分類した研究²³⁾もある。また、久保田²⁴⁾は、「ソーシャルワークは価値・知識・スキルの総体であり、はじめにスキルありきではない。スキルはソーシャルワークの諸価値と整合性を持ち、理論から導き出され

たものでなければならない。ソーシャルワークは価値の実践といわれ、専門性の構成要素の中で価値が重要な位置を占めていることは言うまでもない。価値を具体的援助活動において機能化するのがワーカーのスキルであり、スキルの展開としてソーシャルワーク実践をとらえる作業が必要になってくる。したがって、技術至上主義に陥る愚は避けなければならないが、スキルの教育と訓練が専門職業としてのソーシャルワークには不可欠である」としたうえで、「スキルの教育・訓練・学習プログラム」を示し、スキルの認知的理解、スキルの経験的理解、スキル獲得の予備の確認、スキルの試行、スキル獲得の確認という過程をたどって、SWがスキルを獲得していくプログラムを提案している。

本稿では、ソーシャルワーク実践スキルを、「ソーシャルワークの価値を基盤にして行う特別な知識や訓練を要する行動 (言動) (SWがとる、専門家としての特別な知識や訓練を要する行動の積み重ね)」と定義し、その構成要素を明らかにすることで、地域包括支援センターの社会福祉士が、ソーシャルワーク実践スキルの獲得や向上を目指す研修プログラムの開発に繋げたいと考える。

3. 調査概要

(1) 調査方法

全国の地域包括支援センター435箇所 (札幌市・青森県 (6市15町村)・佐渡市・宮城県 (栗原市・仙台市)・郡山市・大和市・石川県志賀町・福島県須賀川市・流山市・東京都 (港区・足立区・町田市・北区・多摩市)・埼玉県朝霞市・千葉県松戸市・多賀城市・豊田市・広島市・福山市・呉市・宝塚市・桑名市・高松市・愛媛県 (10市9町)・福岡市・北九州市・熊本市・鹿児島市) の社会福祉士435名を対象とし、郵送調査法にて自記式質問票を配布した。地域包括支援センターが創設された平成18年4月1日から平成20年3月1日までの期間において、家庭内高齢者虐待事例を扱った経験のある社会福祉士120名の回答を有効回答とした。調査期間は、平成20年3月14日～3月28日であった。

有効回答者の性別は、女性 (53.8%)、男性 (46.2%) であった。実務年数は、①1年以上4年未満 (41.8%)、②4年以上10年未満 (25.5%) が多く、相談業務の平均実務年数は7.12±6.67年であった。最終学歴は、大学卒 (72.9%) がもっとも多く、社会福祉専攻が57.8%と多かった。

(2) ソーシャルワーク実践スキルの評価指標

O'hara²⁵⁾らは、33項目からなるソーシャルワーク実践評価指標を開発している。この指標は、①治療的、②サポート、③援助計画・評価、④ケースマネジメントの4要素から成っている。この研究では、ソーシャルワーク実践スキルを「ソーシャルワーカーが行う意図的な援助活動全般」と定義し、ソーシャルワーカーの能力ではなく、スキルの活用頻度を測定する指標となっており、具体的に細分化されているのが特徴である。

福島²⁶⁾は、O'hara²⁵⁾らの指標を参照とし、37項目からなるソーシャルワーク実践スキル評価指標を作成している。そして、精神障害者地域生活支援センターに所属する精神保健福祉士267名を調査対象とし、精神障害者地域生活支援センターの利用者に対するソーシャルワーク実践スキルの活用頻度の実態把握を行っている。因子分析の結果、①問題予防や課題解決のスキル群、②信頼関係を築くスキル群、③対人関係技能や自己評価を高めるスキル群、④ケースマネジメントのスキル群の4つから構成されていることを明らかにしている。

O'hara²⁵⁾らが開発した指標と福島²⁶⁾が開発した指標は、いずれも利用者個人に対するスキルか、関係機関との連携を図るスキルが中心となっている。そこで、筆者は、家族病理の多世代伝達過程に焦点をあてたボーエンの家族システム論や、家族内構造に焦点を当てたミニニューチンの家族構造療法などの理論を基盤とし、被虐待高齢者や虐待をする養護者以外の家族成員も含む家族システム内の認知的評価の変容や構造の変容を図るソーシャルワーク実践スキルに絞った30項目を選定した評価指標を用いて、プレ調査を実施した。

本調査では、プレ調査で用いた家族システム論を理論的基盤とするソーシャルワーク実践スキル30項目のうち活用頻度が高かった21項目と、福島²⁶⁾が開発した指標37項目のうち、①クライアント個人に対して問題予防や課題解決のためのスキル、②クライアント個人との信頼関係を築くためのスキル、③ケースマネジメントのスキルなどの14項目を合わせた35項目からなる評価指標を作成し、「4. よくそうしていた」から「1. 全くしなかった」の4件法で測定した。

4. 分析結果

(1) 家庭内で発生している高齢者虐待の実態

家庭内で発生している虐待の発生比率を種類別にみると、①身体的虐待(67.5%)、②経済的虐待(46.7%)、

③心理的虐待(45.0%)、④介護放任(40.8%)、⑤性的虐待(1.7%)という順になっている。虐待発生頻度は、①毎日・いつも(43.3%)、②週に数回(26.0%)が多い。

被虐待高齢者の基本的属性は、性別は、女性(85.0%)のほうが多く、年齢は、①80歳代(50.0%)、②70歳代(38.6%)が多い。要介護度は、①要介護3(15.0%)、②要介護1(14.2%)、③要介護2(12.5%)が多い。認知症状の有無と程度については、①Ⅱ(26.1%)、②認知症状なし(22.6%)が多い。高齢者の世帯構成は、①高齢者と高齢者の息子の二人暮らし(28.8%)、②高齢者と高齢者の配偶者の二人暮らし(16.9%)、③高齢者と高齢者の娘の二人暮らし(9.3%)が多い。被虐待高齢者が、養護者から虐待されていることを認知している比率は、①自覚がある(58.3%)、②自覚なし(41.7%)であった。

虐待する養護者の基本的属性は、性別は、男性(75.2%)のほうが多く、年齢は、①50歳代(36.9%)、②40歳代(21.4%)が多い。養護者の続柄は、①高齢者の息子(48.7%)、②高齢者の配偶者(23.5%)、③高齢者の娘(10.9%)が多い。養護者が、「高齢者に対して虐待を行っている」という自覚がないのが54.2%、「虐待を行っている」と自覚しているのは45.8%である。養護者以外の家族や親族の、高齢者虐待発生状況への認知度は、①「虐待とは認知していなかった(33.9%)」がもっとも多かった。(2)社会福祉士の介入前の家族システム内特性に関する因子分析結果

本調査では、社会福祉士が介入する前の家族システム内機能や構造について、①高齢者や養護者のパーソナリティ特性9項目、②養護者の家族システム内特性15項目、③養護者が育った原家族の家族システム内特性6項目の計30項目について、「極端に目立ってみられた」から「無い」の4件法で測定した。因子分析の結果、6因子が抽出された(「表1」参照)。因子負荷量が0.5以上のものを取り上げる。

第1因子は、「虐待する養護者が育った原家族では、ストレスfulな出来事に対してとった対処行動が、かえって問題を長引かせているということがあった」「虐待する養護者が育った原家族では、外部環境との関係が薄く、閉鎖的な環境であった」など6項目からなり、『虐待をする養護者が育った原家族の閉鎖的環境』因子と命名した($a = .891$)。

第2因子は、「虐待をする養護者に介護による精神的・身体的負担があった」「虐待をする養護者の家族では、介護を代替するなどの手段的サポートがなかった」

「虐待をする養護者の家族では家族内役割が硬直化していた」など7項目からなり、『養護者の否定的感情や孤立的介護環境』因子と命名した ($\alpha = .798$) .

第3因子は、「虐待をする養護者に性格や価値観の偏りがあった」「養護者とそれ以外の家族成員とのコミュニケーションパターンは、いずれかの言いなりになる形態が多かった」など4項目からなり、『養護者と高齢者や家族成員間の偏った勢力関係』因子と命名した ($\alpha = .656$) .

第4因子は、「家族内に皮肉をいう人がいた」「高齢者と虐待をする養護者とのコミュニケーションパターンは攻撃的であった」など3項目からなり、『養護者の家族成員間のトラブル』因子と命名した ($\alpha = .724$) .

第5因子は、「家族内に暴力を振るう人がいた」「家族がストレスfulな出来事に対してとった対処行動が、逆にストレスを長引かせてしまっている様子が見受けられた」という2項目からなる『家族内の問題偽解決パターン』因子と命名した ($\alpha = .672$) .

第6因子は、「家族に、経済的困窮状態がみられた」「家族に、介護以外のトラブルイベントがあった」という2項目からなり、『家族内資源の不足』因子と命名した ($\alpha = .401$) .

各因子を構成する項目の平均得点をみると、①第3因子『養護者と高齢者や家族成員間の偏った勢力関係』因子(平均得点2.35)、②第4因子『養護者の家族成員間のトラブル』因子(平均得点2.26)、③第2因子『養護者の否定的感情や孤立的介護環境』因子(平均得点2.14)の順で高かった。

(3) ソーシャルワーク実践スキルの因子分析結果

地域包括支援センターの社会福祉士が、家庭内高齢者虐待発生事例に対して活用したソーシャルワーク実践スキル評価指標35項目を因子分析にかけたところ、6因子が抽出された。結果を「表2」に示す。因子負荷量が0.5以上のものを取り上げる。

第1因子は「養護者との信頼関係構築のため共感を示した」「養護者の考えや感情を反映し理解を示した」「養護者とストレス解消方法を考えた」など14項目から構成され、『養護者に情緒的支援・情報提供するスキル群』と命名した ($\alpha = .961$) .

第2因子は「虐待原因を、高齢者と養護者の相互作用パターンを分析して明らかにした」「これまでのストレス対処戦略が、かえって問題を持続させていることを理解させた」など6項目から構成され、『虐待原因として

養護者や高齢者の相互作用パターンを分析するスキル群』と命名した ($\alpha = .848$) .

第3因子は「問題行動処理方法を家族成員に伝えた」「他者と会話する際のコツを家族成員に伝えた」「虐待原因を、家族の感情的雰囲気の問題であると認識させた」など6項目から構成され、『相互作用パターンの変容方法を家族成員に提示するスキル群』と命名した ($\alpha = .815$) .

第4因子は「養護者・高齢者・家族成員にとって問題解決状態とはいかなる状態かを確かめた」「問題解決状態を目指すための資源・対処を養護者・高齢者・家族成員と考えた」の2項目から構成され、『問題解決を図る質問技法を用いるスキル群』と命名した ($\alpha = .747$) .

第5因子は「養護者の原家族での価値観が、現在の価値観に影響を与えていることを理解させた」「養護者と過度に情緒的密着している家族成員と、適切な情緒的距離をとる方法を考えた」の2項目から構成され、『養護者の原家族との関係変容を図るスキル群』と命名した ($\alpha = .700$) .

第6因子は『虐待する養護者や家族成員の介護を賞賛した』からなる、累積因子寄与率は61.2%である。

スキル活用頻度の平均スコアは、①第1因子『養護者に情緒的支援・情報提供するスキル群』(平均得点2.68)、②第6因子『虐待する養護者や家族成員の介護を賞賛した』(得点2.67)、③第4因子『問題解決を図る質問技法を用いるスキル群』(平均得点2.56)、④第2因子『虐待原因として養護者や高齢者の相互作用パターンを分析するスキル群』(平均得点2.43)が高い。

5. 考察

本研究の独自性は、家庭内高齢者虐待が発生する背景を探る上で、被虐待高齢者や虐待する養護者の個人的特性のみならず、家族システム内機能や構造の様相に注目した点である。まず、ミニューチンの家族構造療法などの理論や社会的交換/統制理論^{4) 5)}を理論的基盤とし、「家族システムを構成する家族成員相互のコミュニケーションパターンに矛盾増幅ループが、虐待発生事例の背景にあるのではないか。また、家族内役割の遂行期待度と役割遂行度の不均衡が、虐待を生み出すのではないか。」という第1仮説を立てた。次に、社会的学習理論⁶⁾やボーエンの家族システム理論を理論的基盤とし、「高齢者に対する養護者の攻撃性は、養護者が、原家族で幼少時代に親が暴力で問題解決を図ろうとする様子を

表1 社会福祉士の介入前の家族システム内特性の因子分析結果

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子
①養護者の原家族で問題偽解決パターンがあった	.816	-.036	.109	.064	.144	.255
②養護者の原家族では、閉鎖的環境があった	.773	.070	.143	.010	-.010	.002
③養護者の両親は、家族で意思決定する際に子どもに対して勢力関係が偏っていた	.736	-.015	.321	.138	.057	-.156
④養護者の両親は、勢力関係が偏っていた	.726	-.048	.245	.175	.099	.041
⑤養護者の原家族で、虐待をする家族成員がいた	.715	.053	.087	.154	.130	.184
⑥養護者の原家族で、責任を最後まで果たすべきという厳しい家風があった	.643	-.034	-.044	.059	.138	.032
①養護者に身体的・精神的負担がある	-.162	.750	-.194	.347	.073	.056
②養護者の家族では養護者に対する手段的支援がなかった	.130	.713	.137	-.110	.161	-.067
③養護者の家族では介護役割に対する役割配分が硬直化していた	.047	.678	.025	.088	-.036	.098
④養護者に押し付け介護方針がある	-.063	.638	.202	.017	.042	-.031
⑤養護者の家族では養護者に対する情緒的支援がなかった	.165	.562	.218	-.100	.060	.008
⑥養護者に犠牲者意識がある	-.262	.557	.088	.324	.148	.134
⑦高齢者と養護者が共依存関係あり	.315	.506	.195	-.069	-.094	-.216
⑧高齢者に尿失禁・問題行動があり	.033	.464	-.009	-.178	-.168	-.018
①養護者に性格や価値観の偏りがある	.180	.113	.736	.099	.244	.154
②養護者と家族成員と支配的交流パターンがある	.231	.099	.555	.032	.057	-.034
③意思決定時に養護者が常に支配勢力を持っていた	.130	.325	.553	.055	-.048	.190
④養護者と家族成員間に攻撃的交流パターンあり	.092	.079	.557	.359	-.066	.063
①家族に皮肉を言う人がいた	.158	.033	.338	.683	.229	-.112
②高齢者に家族との利害対立や葛藤があった	.107	-.017	.015	.573	.085	.005
③高齢者と養護者に攻撃的交流パターンがあった	.217	-.006	.253	.515	.289	-.122
①家族に暴力者あり	.193	-.085	.241	.298	.746	-.118
②家族に問題偽解決パターンあり	.227	.157	-.009	.053	.683	.075
①介護家族に経済的困窮あり	.079	.120	.194	-.166	-.064	.577
②介護以外にイベントあり	.192	-.070	.015	.048	.028	.521
因子寄与率	14.43	11.27	7.17	6.19	4.92	3.22

因子抽出法：主因子法 回転法：Kaiserの正規化を伴うバリマックス法

Kaiser-Meyer-Olkinの標本妥当性の測定	.746
Bartlettの球面性検定	1221.561
近似カイ2乗	
自由度	435
有意確率	.000

観察し、養護者としての攻撃的な役割モデルと暴力的行動や価値観を学習するのではないかと、という第2仮説を立てた。さらに、井上⁹⁾が提唱した『ストレッサーへの二段階適応モデル』を理論的基盤とし、「家族間暴力は、加害者の個人的適応のみならず、家族の機能的適応力によって生じるのではないかと」という第3仮説を立てた。以上の3つの仮説に基づき、家庭内高齢者虐待発生事例における家族システム内特性を把握した。

仮説を検証するために、社会福祉士の介入前の家族システム特性30項目を因子分析にかけ、各因子の構成要素の平均得点を比較した。分析の結果、「養護者に支配的交流パターンがある」など偏った勢力関係があること、「家族内に皮肉を言う人がいた」「高齢者に家族との利害対立や葛藤があった」「被虐待高齢者と養護者との間

に攻撃的交流パターンがあった」といったように、高齢者虐待発生事例には、家族システムを形成する家族成員間の矛盾増幅ループを生み出すコミュニケーションパターンがあることが分かった。

平均得点が次に高かったのは、「虐待する養護者に介護ストレスがある」「養護者に犠牲者意識がある」「養護者が押し付け介護方針を持っている」「養護者の家族では、介護に関する役割配分が硬直化していた」「家族内で手段的支援や情緒的支援がない」など、養護者が介護役割遂行を通して否定的感情を高めていたり、介護をめぐる家族内役割が硬直化しているということであった。これらのデータより、第1仮説および第3仮説は検証されたといえる。

次に、第2仮説の検証である。因子分析の結果、養護者が生まれ育った原家族における家族システム内のコミュニケーションパターンや家族内役割配分状況、家族システムと外部システムとの境界などの家族内構造や、原家族で培われた価値観（家風を含む）や家族病理が、養護者が現在属する家族システムに伝承されたり、養護

表2 社会福祉士のソーシャルワーク実践スキルに関する因子分析結果

社会福祉士が活用したソーシャルワーク実践スキル	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子
①養護者と信頼関係を築くために共感をしめした	.850	.143	-.030	.081	.022	.092
②養護者に理解を示すため、相手の考えや感情を反映した	.839	.149	.023	.060	.109	-.035
③養護者とストレスを解消する方法をともに考えた	.820	.211	.043	.081	.144	-.060
④養護者の埋もれた感情表出を助けるため優しく質問した	.820	.176	.038	.057	-.004	.055
⑤養護者が受け入れられていると感じられるようにした	.781	.156	.152	.186	.070	.065
⑥養護者のもつ長所や資源の状況をアセスメントした	.768	.096	.157	.030	.035	.062
⑦養護者に対して情緒的サポートをした	.766	.229	.155	.019	.166	-.176
⑧虐待発生の繰り返しを防ぐ方法を養護者に提案した	.767	.219	.022	.038	.194	.003
⑨養護者とともに援助目標を定めた	.753	.017	.160	.057	.121	.203
⑩他施設・機関のサービスを紹介した	.746	-.006	.036	-.042	.098	.111
⑪養護者がうまく決断できるよう手助けした	.745	.125	.141	.284	.015	-.089
⑫養護者の抱える問題を具体的言葉で表現した	.717	.199	.067	-.004	.058	.201
⑬養護者に自信をつけるため成し遂げてきたことを指摘した	.686	.135	.327	.098	-.049	.142
⑭養護者に高齢者の会話形態で変容して欲しいことを聞いた	.520	.505	.177	.163	.220	-.001
①虐待の原因を、高齢者と養護者の会話パターンや行動を分析することで明らかにした(トラッキング)	.168	.831	.028	.152	.201	.110
②虐待の原因を、高齢者や養護者と、他の家族成員との会話パターンや行動を分析することで明らかにした	.194	.647	.087	.112	.175	.087
③高齢者に養護者の会話形態で変容して欲しいことを聞いた	-.030	.638	.378	.359	.057	-.113
④家族成員のストレス反応の仕方が、ストレスを持続させていることを理解できるようにした(問題偽解決パターンの認知)	.339	.558	.336	.038	.263	-.115
⑤養護者や家族が新たな問題発生を予測するよう助けた	.285	.523	.397	.168	.199	.045
⑥虐待発生場面・理由の養護者や高齢者の認識を確かめた	.222	.503	.204	-.031	-.033	.459
①問題行動の処理方法を養護者以外の家族成員に伝えた	.001	.175	.700	.028	.359	.129
②他者と会話するコツを養護者以外の家族成員に伝えた	.145	.201	.695	.074	.278	-.054
③虐待原因について、家族成員の認知度合いを確かめた	-.135	.022	.560	.321	.032	.231
④虐待の原因について、家族の感情的雰囲気の問題であると考えるように仕向けた(問題の再定義)	.176	.438	.523	.311	.184	-.284
⑤高齢者や家族成員と会話する時のコツを養護者と考えた	.392	.370	.519	.060	.163	.129
⑥養護者に対して、家族の会話形態や行動で変容して欲しいと思うことを聞いた(トラッキング)	.398	.303	.508	.058	.046	-.002
①養護者・高齢者・家族成員にとって問題解決状態とはいかなる状況かを確かめた(ミラクルクエスト)	.123	.146	.085	.769	.122	.114
②問題解決状態を目指すためにどのような資源や対処をしたらよいかを養護者・高齢者・家族成員と考えた	.130	.365	.252	.653	-.027	-.087
①養護者の原家族の価値観が、現在の価値観に影響していることを理解させた	.118	.265	.227	.052	.682	-.031
②養護者と情緒的に過度に密着がある家族成員と、適切な情緒的距離をとる方法をともに考えた	.104	.232	.208	.092	.667	.029
①養護者や家族が行ってきた介護を賞賛した	.391	.051	.196	.362	.186	.506
因子寄与率(累積因子寄与率:61.2%)	27.12	11.08	9.45	5.46	4.99	3.1

因子抽出法:主因子法, 回転法:Kaiserの正規化を伴うバリマックス法

Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性の測度	.869	
Bartlett の球面性検定	近似カイ2乗	2555.337
	自由度	595
	有意確率	.000

者の現在の価値観に影響を与えることなどを示す6項目からなる第1因子の平均得点は、低かった。その原因のひとつとして、社会福祉士のアセスメント視点として、養護者の原家族に関する点を取り入れるケースが少なかったことである。「虐待する養護者の原家族では、与えられた仕事は最後までやりとおすべきという厳しい家風があった」という項目については47.2%、「虐待する養護者の原家族で、虐待など（児童虐待・高齢者虐待・DVなど）をする家族成員がいた」という項目については44.9%と、ほぼ半数の社会福祉士がアセスメント視点として取り入れていなかった。これらの結果より、第2仮説は検証されたとはいえない。

次に、家庭内高齢者虐待発生事例に対する社会福祉士のソーシャルワーク実践スキルの活用頻度について把握した。本研究で作成したソーシャルワーク実践スキル指標の独自性は、被虐待高齢者を保護するスキル以外に、虐待をする養護者個人に対する問題予防や課題解決や信頼構築のためのスキルやケースマネジメントのスキルのみならず、家族システム論を理論的基盤とするソーシャルワーク実践スキルをとり入れた点である。ソーシャルワーク実践スキル評価指標35項目の因子分析の結果、6因子が抽出された。

もっとも活用頻度が高かったのは、「養護者にサービスを具体的に説明した」「養護者との信頼関係を築くために共感を示した」「養護者に対して情緒的サポートをした」「（社会福祉士が）養護者をよく理解していることを伝えるために、相手の考えや感情などを反映した」「養護者の埋もれた感情表出を助けるために優しく質問を深めたりした」など、虐待をする養護者個人を対象として情緒的支援や情報提供するというソーシャルワーク実践スキルであった。また、「養護者がこれまで行ってきた介護に対して賞賛した」というスキルの活用頻度も高かった。この結果より、虐待対応ソーシャルワークモデルは、従来の被虐待高齢者の保護に加えて、虐待をする養護者個人の生活の再構築（ファミリーソーシャルワーク）が介入の目標に入っている新しい支援モデルであることが検証されたといえる。

また、養護者個人に対するエンパワメントを目指す専門的な面接技法の活用頻度が高いことも明らかとなった。虐待という事象の解決のためには、社会福祉士の一方的な支援を実施するのではなく、養護者自身の現状に対する認知的評価の変容やエンパワメントを行う必要がある。分析の結果、「養護者や被虐待高齢者やその他の

家族成員それぞれにとって問題解決した状態とはいかなる状態を示すのかという点について、虐待する養護者の認知的評価を確かめる」というミラクルクエスチョンや、「（養護者が示した）問題が解決した状態を目指すために、どのような資源や対処を取ればよいと考えるのかを、養護者や被虐待高齢者および家族成員とともに考えた（スケーリングクエスチョン）」という専門的な面接技法の活用頻度が、上記した2因子に次いで、因子を構成する要素の平均得点が高かった。

ミラクルクエスチョンの技法を取り入れることで、養護者が、生活の構築への願望を具体的な言葉として表すのに役立つ手段となり、養護者自身が自分の夢や目標に到達するためなら大いに努力する効果が期待できる。また、スケーリングクエスチョンは、相談員とクライアントの両者が自信、希望、安全、何かをしようとする意思、その他言葉で表現しにくい多くのことを測定するのに、非常に有効なアセスメント手段である。この技法を用いて、養護者自身に今後の具体的な対処法を考えるようにすすめることで、彼らにやる気や行動、動機付けをすることが可能となる。これらのソーシャルワーク実践スキル（3因子）の活用頻度が高かったことより、地域包括支援センターの社会福祉士は、養護者のありのままを受容し、受け入れ、さらに、養護者の潜在的能力を引き出すためのエンパワメントアプローチの技法を、頻繁に取り入れながら相談に当たっていることが明らかとなった。

上記したような養護者個人を対象としたソーシャルワーク実践スキルに続いて、因子を構成する要素の平均得点が高かったのは、「虐待が発生するのは、どのような場面であるのか、どのような理由が背景にあるのか」という点について、被虐待高齢者および養護者のそれぞれの認識度合いを確かめた」「虐待を生み出す原因を、被虐待高齢者と養護者のコミュニケーションパターンや行動を分析することで明らかにしようとした」「虐待を生み出す原因を、被虐待高齢者と養護者と、その他の家族成員とのコミュニケーションパターンや行動を分析することで明らかにしようとした」「被虐待高齢者に対して、虐待する養護者のコミュニケーションパターンや行動の中で変容させて欲しいと思うことを聞いた」というソーシャルワーク実践スキルであった。虐待の発生原因として、被虐待高齢者と養護者の相互作用パターンを中心としてアセスメントしようとするスキルがよく使われているようである。

「問題行動の処理方法を虐待する養護者以外の家族成員に伝えた」「他者と会話するコツを養護者以外の家族成員に伝えた」「虐待の原因について、家族の感情的雰囲気の問題であると、問題の再定義を家族成員ができるように仕向けた」など、家族内構造や機能の変容を図るための具体的な指針を家族に示すというスキルや、「養護者が原家族で培った価値観の変容を図る」などの価値観の多世代伝承過程を分析するスキルは、他のスキルに比べると活用頻度は比較的低かった。本稿では紙面の都合で掲載することが出来なかったが、この2つのスキルは、筆者が行った重回帰分析の結果、この2つのソーシャルワーク実践スキルは、家族内構造や機能の変容に効果的であることが明らかとなっている^{注1)}。この2つのスキルは、家庭内高齢者虐待発生事例の問題解決に必要であるにもかかわらず、具体的なスキルに関する専門的知識や実践方法などが分らないために、活用頻度が少ないのかもしれない。今後、地域包括支援センターに配属された社会福祉士を、虐待対応専門職として育成していく上での研修プログラム構築の際にも、取り入れる必要があるスキルであると考えられる。

結論と今後の課題

本研究の結果、「家庭内高齢者虐待発生事例に対する、社会福祉士のソーシャルワーク実践スキル評価指標」は31項目から構成されることが明らかとなった。この評価指標の特徴は、「虐待をする養護者個人に対する情緒的支援や情報提供をするソーシャルワーク実践スキル」のみならず、「被虐待高齢者や養護者の相互作用パターンにおける矛盾増幅ループを分析するスキル」や「家族成員間の矛盾した相互作用パターンの変容方法を、養護者以外の家族構成員にも具体的に提示するソーシャルワーク実践スキル」や「養護者の原家族との関係変容を図るソーシャルワーク実践スキル」という、家族システム内機能や構造の変容を目指すソーシャルワーク実践スキルを取り入れている点である。

家庭内高齢者虐待発生事例に対しては、被虐待高齢者の保護や養護者個人に対する情緒的支援や情報提供をするソーシャルワーク実践スキルのほかに、家族全体を肯定的に評価するスキルや、家族成員間のコミュニケーションパターンにみられる矛盾増幅ループの有無やその変容方法を模索するような、家族構造療法を理論的基盤とするソーシャルワーク実践スキルも、高い頻度で活用されていることが明らかとなった。

今後の研究課題は、①家庭内高齢者虐待発生事例に対して活用しているソーシャルワーク実践スキルのうち、社会福祉士が虐待に対応する専門性を内面化している度合いに影響を及ぼしているソーシャルワーク実践スキルは何か、②家庭内高齢者虐待対応専門職として、社会福祉士がソーシャルワーク実践スキルを向上するための研修や養成教育として、ソーシャルワーク実践スキルの習得にいかなる教育方法が必要であるのかを導き出すことである。これらの研究を通じて、社会福祉士の専門性に対する自己評価と社会的評価が向上することに貢献できることを強く望んでいる。

*本研究は、平成19年度文部科学省科学研究費の補助を受けて実施されたものである。

この場を借りて、本研究における調査に協力して頂いた皆様に心より感謝申し上げます。

【注】

注1) 社会福祉士が介入した後の「家族システム内機能や構造の改善度」を従属変数、「社会福祉士が活用したソーシャルワーク実践スキル」を独立変数とする重回帰分析の結果、『養護者と高齢者の二者間の交流パターンの改善』因子には、『養護者の原家族との関係変容を図るスキル群』因子と『相互作用パターンの変容方法を家族成員に提示するスキル群』因子が正の規定力を示した。また、『家族システム内交流パターンの改善』因子には、『相互作用パターンの変容方法を家族成員に提示するスキル群』因子と『虐待する養護者と家族成員の行ってきた介護を賞賛するスキル』が正の規定力を示した。これらの研究成果に関しては、第5回日本高齢者虐待防止学会千葉大会（平成20年7月）にて口答発表をしており、今後、学会誌への発表を予定している。

【引用文献】

- 1) 社団法人日本社会福祉士会虐待対応ソーシャルワークモデル研究会監修, 2008, 『地域の高齢者虐待対応におけるソーシャルワークアプローチに関する調査研究並びに研修プログラムの構築事業報告書』.
- 2) 一瀬貴子, 2007, 「虐待が発生している家族集団の家族機能的適応能力と虐待発生頻度との関連」『関西福祉大学紀要』第10号, 169-177.
- 3) Gelles, R.J, 1993, "Through a Sociological Lens : Social Structure and Family Violence", Current Controversies on Family Violence, 34-36.
- 4) Gelles, R.J, 1983, "An exchange/control theory", The Dark Side of Families : Current Family Violence Research, 151-165.
- 5) Phillips, L, 1986, "Theoretical explanations of elder abuse : competing hypothesis and Unresolved Issues, 197-218.
- 6) Bandura, A, 1977, Social Learning Theory.
- 7) Frude, N, 1989, "The physical abuse of children", Clinical Approaches to Violence, 155-181.
- 8) Hollin, C.R, 1993, "Contemporary psychological research into violence", Violence in Society, 55-68.
- 9) 井上眞理子, 2005, 『ファミリー・バイオレンス～子ども虐待発生のメカニズム』, 92-10 晃洋書房.
- 10) 井上眞理子, 2007, 『リスク・ファミリー～家事調停の現場から見た現代家族』, 36-54, 晃洋書房.
- 11) Chibucos, T.R, Leite, R.W. & D.L.Weis, 2005, Readings in Family Theory, 279-281.
- 12) Broderick, C.B, 1990, "Family process theory", Fashioning Family Theory.
- 13) 安達映子, 2005, 「高齢者虐待とみなされた介護家族との実践：ナラティブ・ベイスト・ソーシャルワークへの試行」『家族療法研究』第22巻第2号, 141-147.
- 14) 鶴沼憲晴ら, 2007, 「虐待者である「息子」の特徴と高齢者虐待防止への視点—研修参加訪問介護員へのアンケート調査からの知見」『社会福祉学』47 (4) , 111-123.
- 15) 山口光治, 1994, 「ソーシャルワーク実践としての高齢者虐待研究の意義」『社会福祉研究』74, 82-89.
- 16) 山口光治, 1998, 「実践報告 在宅高齢者虐待の事例研究」『ソーシャルワーク研究』24 (2) , 148-153.
- 17) 山口光治, 1997, 「わが国の在宅高齢者虐待に関するソーシャルワーク援助—高齢者虐待の概念整理を中心に(特集ソーシャルワーク実践の諸相と課題)」『ソーシャルワーク研究』22 (4) , 319-328.
- 18) 江原勝幸, 2004, 「高齢者虐待問題における専門援助機関の設置に関する考察—ソーシャルワーク実践と地域ネットワークの活用」『研究紀要(静岡県立短期大学部)』18, 171-181.
- 19) 小銭寿子, 2004, 「高齢者虐待への援助視点—高齢者ソーシャルワークと虐待予防」『道都大学紀要 社会福祉学部』30, 77-102.
- 20) 前田ケイ, 1984, 「グループワーク方法の技能(スキル)をめぐる」『キリスト教社会福祉学研究』17,6-18.
- 21) 小松源助, 1983, 「社会福祉方法原論」序説『社会福祉学』24 (1) , 1-50.
- 22) 奥田いさよ, 1989, 「ソーシャルワークの技能—ソーシャルワークにおける援助技術の体系化を目指して」『ソーシャルワーク研究』15 (1) , 51-57.
- 23) ボーゴ, M. & 高橋重弘, 1991, 「トロント大学大学院ソーシャルワーク学部におけるCBEの最近の発展—コンピテンシー要素・技能・評価表を中心に—」『社会福祉研究』51, 15-21.
- 24) 久保田美紀, 2004, 「第9章 スキルの教育と訓練」, 『ソーシャルワークの技能』, ミネルヴァ書房, 175-193.
- 25) O'hara, T., Colins, P & Walsh, T, 1998, Validation of the Practice Skills Inventory with experienced clinical social workers, Research of Social Work Practice, 8 (5) , 552-563.
- 26) 福島喜代子, 2005, 『ソーシャルワーク実践スキルの実証的研究—精神障害者の生活支援に焦点を当てて—』, 筒井書房.